

次の文章は、伊藤整の小説『少年』の一部分にあたります。この小説の舞台は戦前の小学校で、当時は中学校に進学するには受験が必要でした。本文を読んで後の問いに答えなさい。答えは問九以外はすべて黄色の解答用紙に書きなさい。

「靖ちゃん、お前どう思う？ おれ中学校に入れると思うかい、思わないかい？」とある日学校で、房太郎は校庭の柵になっっている丸太に腰かけて言っのであった。

「入れるさ、大丈夫だよ。一番難しい算術だって、あの本があるからいいし」

私は、いつとなく房太郎と遊んでいるうちに、彼の気に入るような嘘を言う習慣がついていた。本当にそうだと思っていないことを言うとき、胸のあたりが空っぽになるようだった。私は、房太郎があの算術の本を持っているだけで、ちつともそれを勉強していないことを知っていた。それどころか学校の六年の算術だって、やつとで、そばで聞いている私にわかることも、何度か田崎先生に説明してもらわないと合点できないことがあった。房太郎は試験前までに、あのねずみ色の本をみな覚えておくと言っているが、そんなことはできそうもないと私は思った。六年の算術も、私は房太郎の習っているのをそばで聞いていて、たいていはわかるのだった。これができればもう大丈夫なのよ、と田崎先生が言っている鶴亀算を、房太郎はどうしてものみこめなかったが、私は理解していた。私ならあの本を読めばみんなわかるのだから、と思っていた。

「本当に靖ちゃん、①そう思うかい？」 A 彼は不安げにきくのであった。私が保証すれば間違いないというように。すると私は出来る子としての自信が浮かんで来て、もう一度房太郎の身体や顔を眺めまわすようにしてやった。危ないもんだなあ、というような顔で。しかし私は口先だけ、

「大丈夫だとも。算術の本の問題はたいていできるんだろ」
「うん、だけど……」といて、房太郎は眼をふせた。彼がすこししよげた様子を見せると、私はこの年上の友達に対する②自分の優越感を味わうのであった。彼は紺の③一重縞から出ている細い脛をぶらぶらさせ、④下駄を遠くの方へぼんとほうった。下駄は前の日に降った雨でできた水たまりに落ちて、裏がえしに浮いた。

女の子たちが四、五人、向こうの生徒出入り口から出てきた。掃除当番でもあったのだろう。私の組の子たちであった。どの学年も男女合併で五十人あまりで一組になっていた。その中に西川京子がいるのが私にすぐ分かった。京子はこの頃隣の町から越してきた駅長の娘で、黒いセルの袴をはいていた。外の女の子は、赤い袴をはいているのがあったが、それも二、三人で、あとは、袴をはいていないのだった。元禄袖の着物に、厚紙を入れた赤い草色の兵児帯を胸高にしているだけであった。西川京子の黒い袴は、何となく都会風で、蒼白い、眠尻のやや釣りあがったその顔によく似合っていた。

「あの駅長の子は何て言うんだい？」と房太郎が言った。
京子のことだった。

「あれか、西川京子だよ」

「出来るかい？」
「うん」

さあつと秋風が吹いて、校門の前のポプラの並木は、一せいにさらさらと鳴り、中頃から上が弓のように曲がった。帽子が水たまりに飛ぶといけなかったので、私は庇をうんと引き下げた。女の子たちの髪が風に吹かれて、そそけだった。京子の黒い袴は短かめだったので、風に吹かれると白い脛が膝のあたりまで見えた。何だか、私は、風が吹くとさびしく、不安になるのであった。だれも私をかばってくれたり、仲よくしてくれたりする本当の友達はい人もいないような気がするのであった。京子は、同じ組の富永福子ほどか

わいい子ではなかった。でも様子全体が都会風で、きびきびしている。どこか男の子のようなところがあつた。しかしどの女の子も、私と仲よくしてくれそうもなかった。そして、私といま一緒にいる房太郎は嘘つきで意地悪だ。私は風の吹く中で④自分が全くひとりぼっちでさびしいと思つた。

「おい、その下駄を拾ってくれよ」と房太郎が通りかかった女の子たちにつた。私は帽子を眼深くかぶつたまま、そしらぬ風をしていた。B 私はポプラの並木が風に揺られては空に向かって手をふりまわすようにしながらまた起きかえるのを見ていた。葉が白く裏がえつた。そういうとき、私は自分が父も母もない孤児のような気持ちになるのであった。でなければ、わあつといてて両手をひろげて風上に向かって走り出したいような感じもした。

「おい、その下駄拾ってくれよ」と房太郎はまた声をかけた。

漁師の娘で、一番身体の大きい竹島ハナが下唇を突き出して赤んべえというような顔をした。外の女の子はうつ向いて恥ずかしそうに急ぎ足で私たちの前を通り抜けようとした。「誰か取ってくれないかなあ」と房太郎がまた言った。

すると、水たまりに一番近いところを、頭を下げもせず、急ぎもしないで歩いていった西川京子が、身体を屈めて、下駄の歯を二本の指でひよいとつまみあげ、私たちの腰にかけている柵まで持ってきて、「はい下駄」とそれを房太郎の鼻先へつき出した。房太郎はだまってそれを受けとった。房太郎は急に赤い顔をした。

どうもありがたうという言葉を使う習慣が私たちにはほとんど無かつた。私も房太郎の家でお菓子をもらうときなどだまって受け、食べてしまつてから、ごちそうさまと言つのであつた。⑤京子のこういう仕方はこの村のものではなかつた。村の女の子たちは、房太郎が彼女らにからかっているのだというのを知っていた。京子がそれを、頼まれたことだと思つて下駄を取ってくれたのは、房太郎をまごつかせた。私もびつくりした。

京子はまつすぐな眼つきで、房太郎を見、それから私の方を見て、自分が少し変なことをしたと気がついたらしかった。京子は急に赤い顔になり、友達のを追つて走つた。外の女の子たちは、校門のところに集まつて、おぼれかけた人が岸に着くのを見るような様子で京子を待っていた。房太郎は下駄を受けとったものの鼻緒が濡れているので、それを柵の上に、歯をまたがせて、そつと置いた。私たちは二人とも工合が悪くて、しばらくだまつていた。

京子は田崎先生と町にいた時からの知り合いであつたらしく、休み時間に看護当番で田崎先生が運動場に出てくると、よくそばに立つて話していた。京子は時々同級の女の子たちと遊んでいることがあつた。しかしその様子はまたこの村の女の子たちとしくりしていなかった。女の子たちは京子をつけて、ちらつと仲間だけで眼を見交わしたりしていることがあつた。村の女の子たちが町の子をのけもの扱いにすることを私はよく知っていた。男の子たちですら、漁場の子と農家の子が別なグループを作っていた。私が村で育つた子なのに、漁夫でも農家でもない軍人あがりの、⑥収入役の子だといふことで私をのけものにしがちであつた。私が房太郎のような同級でもない妙な子と遊ぶようになったのも、そういう孤独感から来ているのであつた。

⑥私は京子に同情した。京子は勉強は美によく出来て、伏見先生は、私と岩田六郎と京子とに、難しい問題を選んで授業時間中でも別にやらせたりした。それは京子が来るまでは、岩田と私の二人がさせられていた特別課題で



あつたのだ。外の子供たちでも、その時間の課題を早く仕上げると、私たちの課題の中から一題か二題割りあてられて、するのであつた。

「来年上級学校を受験するものは、今からその気になって、一題でも二題でも特別問題をしなければいけない」と先生は皆に言った。

入学試験では都会の生徒に負けるのが常であつたから、教師も生徒も真剣であつた。算術の特別課題をもらつと、京子はやりがいがあるという風に、一刻も早くという調子で問題にとりかかるのであつた。女生徒の席の一番後ろの隅っこに彼女はいた。私と岩田は男生徒の席の一番後ろにいたので、それが自然と競争のようになった。もう出来たという頃になると京子はちらつと顔をあげて、素早く私と岩田の方を見るのであつた。私も、海にもぐるような息苦しい気持ちでその問題にとりかかつて、もう一息という所まで来ると岩田の方を見、それから京子の方を見るのであつた。岩田は特別に数理的な頭のいい子で、たいてい一番先に仕上げて、そしらぬ顔をしているが、その次が私と京子との競争であつた。⑦一種の敵意のある、それでいて親しみのある目つきを、私は京子と交わすのであつた。それでいて、外るときは私は京子と話をしたこともなかつた。

放課後京子は教員室の窓の下の白ちやけた板壁にしよんぼりよりかかつてゐることがあつた。四時になると先生たちもひける。京子は田崎先生と一緒に海岸の方へ散歩に行つたりした。二人が並んで海岸の方から戻つて来るのを時々私は見かけた。房太郎の家の前まで来ると、京子は大人のように腰をかがめて挨拶をし、**テイシャバ**の坂の方へ行くのであつた。そのうち、京子は田崎先生の室で時々遊んでゆくようになった。

北の国では秋の早いうちに突然霰が降つたり、冷たい雨が障子を濡らしたりした。目に見えて日が短くなつた。房太郎の家では⑧炉に炭火をおこした。その頃から房太郎は前より勉強に熱中しはじめた。彼が私に約束した田崎先生の手紙はとうとう見せてくれなかつた。房太郎は前と変わつて何だか真面目になった。⑧そして彼が真面目になると、私は彼の交友が面白くなくなるのだった。房太郎が女の子に悪戯したり、先生たちの内緒ことをあばいたり、店の金を持ち出して、小母さんのくれる煎餅や、豆でない、本当に甘い饅頭や羊羹の買い食いをして私を仲間に入れるのでなければ、私はつまらなかつた。私が自分では出来ないことを、彼が、彼の責任でやる、そして得をするのは私だ、という形の中に、いつの間にか私はおぼれていたのであつた。

風は次第に寒くなり、村の周囲の山々の樹が紅葉しはじめた頃、ある朝房太郎は登校の途中の私を自家の横の戸袋のかけへ呼びこんで「おい、靖ちゃん、これを西川京子にやつてくれよ」といつもと同じ青い尖つた顔で言い、掌に入るような小さな封筒を握らせた。「うん」と私は言つて懐へしまったが、学校にゐる間じゅう、それを開いて読みたいという誘惑を感じてゐた。⑨西川京子に渡してやるものと私は思った。それは怖ろしいことでもあり、憎らしいことでもあつた。しかも私は読むことを怖れた。家へ帰る途中、私はそれをちりぢりに引き裂いて、橋の上から川の上へ投げた。紙は一度かたまつて落ちていったが、橋脚のところではと散り、川上の方へ遠く吹き飛ばされるのもあり、柳の木の枝の中へ吹き上げられるのもあつた。

私はそのとき一刻も早くそうしないではいられぬような気持ちがついたのだ。その手紙を読まずに破いたことは私の心にやましさは覚えさせなかつた。でも私は興奮していた。これまでに知らなかつた一種の強烈な不安の感じだつた。紙が風に吹かれて川の面に散つていったのを見ると、私はそれを誰かに見られはしなかつたかと考え、怖ろしくなつた。私は橋から人家のある方へ歩きながら、あたりに気を配つた。川のそばには、漁に行つたり小作をしたりする人たちの小さなわびしい家が並んでいた。軒下で縄のしつぽが

風に吹かれて、はためていた。鱗形に油をぬつた紙障子の戸には煤けた小さな硝子窓などが見えたが、誰も人の姿はなかつた。私は胸のあたりが焼けるようになってゐるのを感じた。私は家の方へ急いで帰つた。畑の畔に落葉樹が四、五本立っていて、横にのびた枝は小さき風にゆすぶられていた。私は家に入り、自分の小さな机の前に坐つた。すると自分がこうしてゐられない罪人になつたような気がした。房太郎にも言えないし、母にも言えないこの秘密は私の胸をおしつけた。弟や妹たちが縁先で紙を細長く裂いては飛ばしていたが、その弟や妹たちにも自分の顔を見られるのがいやであつた。晩御飯のとき、父は母に、田崎先生が学校をやめると④学務委員の山田が言つていた、と話していた。

「稲木でも困るでしょう。せつかく中学校の試験を通そうと思つて房ちゃんの勉強を見てもらつてゐるのだからね」と母が言つた。

「うん、まあ」と父は、私の前ではあまりその話にふれたくない様子であつた。

「うちでも、靖が厄介になつてきたから、何かお礼をあげないといけませんね」と母が言つたが、父はうなずくだけであつた。

私は食事がすむといつものように本と**チョウウメン**を包んで房太郎の家へ行つた。風は落ちついて静かな晩になつていた。いつもと同じに食卓の両側に私と房太郎が坐り、先生が真ん中にいて勉強をはじめた。その日房太郎の父は留守で、小母さんだけが針仕事を持つて炉端にいた。先生は白い美しい指で私の**チョウウメン**に算術の問題をいくつか書いて与え、あとは房太郎の方にかかつていた。房太郎は、その晩私の方をほとんど見なかつた。私は、運算し、一つずつ答えを書き出して行つたが、これまでと違つて、私たちの勉強というところが、小さな意味しか持つてゐないような気持ちになるのであつた。⑩房太郎も私も大きな秘密を持つていて、そして私の方は、その房太郎をも裏切つてゐるのだった。しかし私は、自分のしたことが正しいと考へて自分を落ちつかせようとした。房太郎のように女の生徒に手紙をやることは、いけないことにちがひないのだから。

だが、子供の世界には、子供の世界での大人の真似があつた。あの子はあの子が好きだ、とか、あの子とあの子は何々だ、とかいうことは、その村の子供たちの間では、むしろ大人たちよりもむき出しに、残酷に、そして正確に言い伝えられたり、面とむかつてしゃべられたりしていた。どの子がどの子に手紙をやつたなどということもよく子供の世界の噂になつた。そして私ははじめて、身近にその実際のことにつづかり、途方に暮れて破いてしまつたのだった。

勉強がすんでお菓子が出てからも、その晩は田崎先生は二階の室へ上がつていかず、炉端で小母さんと話こんでいた。私は本を包んで帰る支度をした。いつもお菓子のあとで、房太郎の室でしばらく遊ぶのであつたが、その日は私は早く帰りたいと思つた。すると房太郎がちらと私の方を見た。頬のとがった蒼い顔で、白眼が目立つ彼の眼は、私の様子をじつと見つめていた。彼は不安そうに疑わしげに私をにらんだ。

「おや、靖ちゃん、今夜は早いんだね。もう帰るの？」と小母さんが言い、膝の針仕事を下ろして立ち上がった。

私は房太郎に感づかれたような気がした。私はそこへ本の包みをおき、帰るのをやめて、だまつていつものように房太郎の後について彼の室へ行つた。「おい、靖ちゃん、あれ渡したかい？」と廊下で立ちどまつて房太郎が言つた。

「うん」私は**チュウ**に眼をやつて答えた。

「どこで？」

「橋のとこで」

「何とか言つたかい？」



彼の白い眼が私の顔をなでまわすように見た。私は、ぐっとつまった。そこから房太郎の室へ入るまでに返事を考えなければならなかった。京子はとうするだろう。そういう時に、私が帽子をかぶってあの橋のそばにいる。京子が学校の方からやって来る。すると私が呼びとめる。私は何と言って呼びとめるだろう？ 彼女が町の学校から移って来てからまだ半年ほどにしかなっていない。本当は私はまだ京子に話しかけたことがないのだった。たった一度、校庭掃除の割りあてがあつたとき、副校長の私は組の者の名を伏見先生のくれた紙のとおり呼び上げたことがあつた。「西川」というと、京子は「はい」と、この村のどの女生徒ともちがうはつきりした返事をして、私の方をまっすぐに見た。たいてい女の生徒は「はい」と口の中で小さな声で言うのだが、京子はちがつていた。

いま房太郎の目の前で、私は懸命に頭を働かせた。^① ああいう返事のしかたをする京子は、私がもし房太郎の手紙を渡したら何と言つたろう。そんな取りつぎをする副校長の私を彼女がだまつてにらみつけるような気がした。そしてその手紙を持ったまま、もしもししている私を残して、さっさと行ってしまうにちがいない。

そのうちに、私と房太郎とは室へ入って坐つてしまった。私は追いつめられて飛びこむように、手紙を裂いた自分と、京子のキシツと思われるものとを結びつけた。

「おれね、西川が来たから手紙渡したんだよ。そしてこっちの方へ歩いてきたんだ。角のところで見たら、西川は、手紙を小さく裂いて川の上へ投げていたよ」

私はそう言つて、房太郎の顔をちらつと見た。自分の眼が熱く燃えているような気がした。すると、房太郎の顔は急に一層意さめて、ほっそりとなつたように見えた。

「ふーん」と彼は^②鼻であしらうような返事をしたが、今度はうつ向いて考える様子になった。彼は中学の入学試験の算術の種本だと言つていたねずみ色の表紙の本をぐるぐる巻くようにした。それは軟らかい表紙であつたが、本がかなり厚いものであつたので、思うように巻くことができず、頁がばらばらとはじけた。^③ それでも彼は考えこみながら、それを巻こうとするのであつた。来年彼が中学に入れば、その本を、その次の年に受験する私に貸してくれると彼は言つていた。中学の先生の種本だということで、私はそ

の本を借りるためには、どんなことでも彼の言うとおりになつていようと覚悟していた。それが分かつているせいか、彼は何かという私の眼の前でその本を見せびらかすのだ。でもいま彼の頭はそれどころでなく、混乱してしまつてることが分かつた。京子が手紙のことを先生や両親にいいつけはしないかと彼は心配になつてきたのだ。房太郎の混乱が私にすぐ感染した。私も彼と同罪だという考えが、ちらと心に浮かんだ。だが、渡さなかつたんだ。手紙は渡さなかつたんだ。私が房太郎のように手紙の^④露顯するのを心配するのはいいことであつた。それでも、彼と一緒になつて、あの手紙のことで、先生や親たちに叱られそうな怖れを感じなければならないような気持ちに去らなかつた。

「いいや、あんなやつ。ちよつとからかつてやつただけなんだから」と房太郎は不安を抑えるように言つた。

「うん」と言つて、私も彼と同じように、西川京子に手紙を渡してしまつた感じを自分の内側に持ちつづけていた。その晩房太郎はだまりがちであつたし、私は彼のために京子との交渉をうまく取りはかれなかつたのを残念に思う風にも静かにしていた。

この日からあと、^⑤私は奇妙な、二つのちがつた心の動きを本当らしく進めて行かねばならないという^⑥作爲の世界に入つていった。

甘やかされて育ち学校で出来の悪い上級生で、来年の中学校の入学試験に落ちるにきまつていても、何となくずるくつて鋭いところのある房太郎を、そのかしては、店の売り上げで羊羹の買い食いのお相伴をしたり、田崎先生に男から来る手紙の話を聞いたりすることは、私にとつてぼんやりと楽しいことであつた。しかし今度のことはそれと違つていた。もつとはらはらする、危なっかしいことで、怖ろしいが、何となく新しい張り合いもその中にあつた。

(伊藤整『少年』より)

【注】

- 1 一重耕……初夏から初秋にかけての裏地のない和服
- 2 収入役……役場の会計を担当する職員
- 3 炉……いろいろのこと
- 4 学務委員……当時の公立小学校の教育事務を担当した職員
- 5 露顯……かくし事があらわになること

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みかたをひらがなで書きなさい。

問二

- | | | | | |
|------------|--------------|------------|------------|------------|
| a 合点できない | ……ア 共感できない | イ 認められない | ウ 理解できない | エ 安心できない |
| b 厄介になつてきた | ……ア 重荷になつてきた | イ 面倒をかけてきた | ウ 大切にされてきた | エ 迷惑をかけてきた |

問三

- A 彼は不安げにきくのであつた。私が保証すれば間違いないというように。
- B 私はボプラの並木が風に揺れては空に向かつて手をふりまわすようにしながらまた起きかえるのを見ていた。とありますが、それぞれのよう

- ア 擬人法 イ 対句 ウ くり返し エ 体言止め オ 呼びかけ カ 倒置法

問四

- ① そう思つかい？ とありますが、「そう」が指す内容を表す一文を本文中から探し、初めの五字をぬき出して答えなさい。
- (句読点も一字と数えます)

問五 ② ① 自分の優越感 とありますが、「私」自身の優越感には当てはまらない本文中の表現を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 私は房太郎がああ算術の本を持っているだけで、ちっともそれを勉強していないことを知っていた。

イ 六年の算術も、私は房太郎の習っているのをそばで聞いていて、たいていはわかるのだった。

ウ 田崎先生が言っている鶴亀算を、房太郎はどうしてものみこめなかったが、私は理解していた。

エ 私は出来る子としての自信が浮かんできて、もう一度房太郎の身体や顔を眺めまわすようにしてやった。

問六 ③ ① 下駄を遠くの方へぼんとほうつた とありますが、この時の房太郎の気持ちとしてもっともよく当てはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分にとって算術が苦手なのは靖ちゃんが教えてくれないからだ、とげとげした気持ち。

イ 靖ちゃんの励ましで自分が算術ができないことを強調しているように感じて、むかむかした気持ち。

ウ 靖ちゃんが励ましてくれても算術ができないことを不安に思っ、くさくさした気持ち。

エ 自分がどんなにがんばっても算術の成績はのびないとあきらめて、めそめそした気持ち。

問七 ④ ① 自分が全くひとりぼっちでさびしいと思った とありますが、「私」はなぜさびしいと思ったのですか。もっともよく当てはまるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私は勉強が得意で上級の学校に進む自信があるため、村の子どもたちと話しても物足りないから。

イ 私は村の子たちとしつくりいかず、そうかといって女の子である京子にも相手にされていないから。

ウ 私が一級上の房太郎と親しくしているために、村の同級生はおそれて近寄らないから。

エ 私とはだれも仲良くしてくれず、嘘つきで意地悪な房太郎と一緒にいるしかないから。

問八 ⑤ ① 京子のこういう仕方 とありますが、「こういう仕方」とはどのような行動のことを指しているのですか。本文中の言葉を使って、解答らんに合うようにまとめて書きなさい。

京子が

行動のこと。

問九 ⑥ ① 私は京子に同情した とありますが、「私」はどのような点で京子に同情したのですか。二人の事情にふれながら、共通点を挙げて説明しなさい。

答えは左の解答らんに書きなさい。

私は、

という共通点のために京子に同情した。

問十 ⑦ ① 一種の敵意のある、それでいて親しみのある目つき とありますが、ここでの「敵意」と「親しみ」にもっともふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「敵意」

……

ア けおとす意識

イ せりあう意識

ウ みくだす意識

エ うらむ意識

「親しみ」

……

ア うやまう意識

イ ひかれあう意識

ウ 心配する意識

エ 認めあう意識

問十一 ⑧ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄



問十二 ⑨ 西川京子に渡してやるものか、と私は思った。とありますが、それはなぜですか。理由として当てはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア せっかく西川京子とも房太郎とも親しくなったのに、二人が近づくともまた自分が一人ぼっちになってしまうから。
- イ いつもは房太郎の責任で何事もやっていることなのに、今回は自分に責任を押し付けられたような気がしたから。
- ウ 自分も西川京子のことが気になっていたのに、房太郎に手紙を渡すように頼まれて反感を覚えていたから。
- エ 西川京子のような目立つ女の子に手紙を渡したことがまわりの誰かに知られたら、自分がうわさになってしまうから。
- オ たとえ西川京子が手紙を受け取ったとしても、意地悪な房太郎と優等生の京子はそりが合わないだろうと思ったから。
- カ 見下していた房太郎に手紙の取り次ぎを頼まれ、自分が都合よく使われているようでよかったから。

問十三 ⑩ 房太郎も私も大きな秘密を持っていて、とありますが、房太郎と「私」の「大きな秘密」とはどのようなことですか。それぞれ解答らんにか合うように、二十字から三十字にまとめて答えなさい。(句読点も一字と数えます)

房太郎が こと。
「私」が こと。

問十四 ⑪ ああいう返事のしかたをする京子、とありますが、「ああいう返事」によって、「私」は京子をどのような人柄だと理解しているのですか。次の中からもつともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 他の子どもたちとずれていて子供の世界になじめない、世間知らずで純情な人柄。
- イ 男の生徒とも算術の課題で競争するような、負けん気の強い人柄。
- ウ 他の女の生徒とは違って自分の意志をはっきり表現する、裏表のない人柄。
- エ 他人からどう見られるかをいつも気にしている感情のこまやかな人柄。

問十五 ⑫ 鼻であしらう、について次の問いに答えなさい。

- (1) ここではどのような意味ですか。もつともふさわしいものを次の中から選んで記号で答えなさい。
 - ア すっかり落ち込んだ態度をとること
 - イ あえて冷たい態度をとること
 - ウ ひどくあわてた態度をとること
 - エ まともに相手にしない態度をとること
- (2) 同じような意味を表す表現を次の中から選んで記号で答えなさい。

ア おくびにも出さない イ 裏をかく ウ 浮足立つ エ 一笑に付す

問十六 ⑬ それでも彼は考えこみながら、それを巻こうとするのであった。とありますが、この時の房太郎の心情としてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 京子に相手にされなかったので受験勉強が手につかないと、あせっている。
- イ 京子が手紙のことを大人にいつけたら大変だと、気にしている。
- ウ 京子にうまく手紙を渡してくれなかった私を責めて、不満に思っている。
- エ 京子がなぜ自分を相手にしなかったかが分からず、不審に思っている。
- オ 京子が自分の手紙を拒絶したという話を聞いて、動揺している。
- カ 京子になぜ手紙を書いてしまったのだろうか、後悔している。

問十七 ⑭ 私には奇妙な、二つのちがった心の動きを本当らしく進めて行かねばならないという作爲の世界に入っていた。とありますが、これはどういうことですか。次の中から、当てはまるものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 西川京子に房太郎の手紙を渡してしまった感じを、自分の内側に持ち続けていくこと。
- イ どんなことでも房太郎の言うとおりにしていこうと、自分の覚悟を決めていくこと。
- ウ 手紙が先生や親たちに露顯するのを心配しなくても大丈夫だと、自分に言い聞かせていくこと。
- エ 房太郎をそそのかして、買い食いや先生のうわさ話をして自ら楽しく過ごしていくこと。
- オ 出来の悪い上級生である房太郎に、来年の中学校の入試に合格すると励ましていくこと。
- カ 房太郎が西川京子に思いを寄せていたということ、いつまでも告げずにいくこと。

ディシャバ

人
家

1000

チ
ュ
ウ

キ
シ
シ

[illegible]

a



—
—
—
A



5

25



--

行動のこと。

問九 答えは 国語―四の解答らんに書きなさい。



5

[illegible]

20

30

私が

[illegible]

20

30

[illegible]